

SPY COMEDY MUSICAL

湿った土の中で

SOARS MUSIC THEATER 2022 Vol.3

SPY COMEDY MUSICAL 原作序章 【湿った土の中で】

作：片山行茂

ぬかるんだ泥水を飛散しながら走り去る黒い高級車。
遠のくエンジン音が振動を伝えて聴こえる。
きっともう彼等は、此処に戻って来てはくれないだろうな。

「しまったなあ・・・」

今日は私、完全にやってしまった。

此処に来る前に、事務仕事をちゃんと済ませておけば良かったと、今とても後悔してる。

課長から指示を受けた企画書類、5カ所の訂正と会議出席者分の資料コピー。

そして宅急便の配送手続き。

慌ててオフィスを飛び出して来たから、全てほっぽり出したまま。

宅急便くらいは出荷棚に移動してから出るべきだったな。

配送センターのいつもの彼、少し私に気があるんじゃないかって思う彼だけど、デスクの上、気が付いて集荷してくれたり

・・・しないわよねえ。

ああ、私のせいで明日は、一悶着起きる事は間違いない。

課長が私の名前を叫びながら怒鳴りまくっている画が目に浮かぶ。

「辛いなあ、まあ・・・でも、もう逢う事もないか・・・課長と営業企画課の皆さん、迷惑掛けて本当にごめんなさい！」

今更仕方ないし、もう残念ながら、此处から引き返す事は出来ない。

心の中だけど、ひとまず土下座します。

それに私は、もう一つ決定的にやってしまったのよ。

先に伝えるべきだったかもしれないけど、実は私。今、冷たく湿った土の中にいるの。

いや、蟬の幼虫じゃないからね。

ほら、今さっき、黒い高級車で走り去った男どもに埋められてしまったのよ。

口には猿ぐつわをはめられ、両手両足もしっかりとロープで縛られ、まさに絶対絶命の状況に、私は今あるのです。

「ボス、怒るだろうなあ・・・」

あ、自己紹介が遅れましたね！

私、大手流通会社ホリデーの営業企画課に配属されております “佐渡玲子(さわたりれいこ)”と申します。

なんと本日、めでたく27歳の誕生日を迎えた、花の独身OLです。

・・・しかし、それは表の顔。

というか、仮の姿。

私の本当の顔は、国家に育成雇用された秘密工作員 0013(ダブルオーサーティーン)。

ほら、俗に言うスパイなの。

.....

そんな“漫画や映画みたいな話”と、あなたは思うかもしれないけれど、この社会には当然表と裏があって、その社会全体の秩序を守る為に、私達“秘密工作員”は、色々な現場に配属され一般人としても働いているのです。

例えば学校、例えば会社、例えば病院・・・

ああ！ひょっとするとあなたの隣の席の〇〇さんが秘密工作員である可能性もあるのよ。

まあ、秘密工作員ですから、そんなの気が付かなくて当然なんだけどね。

うん、そして。

これが本当の最期だと思って、恩着せがましく言っておくと、あなたが毎日“のほほん”と平和に暮らしているのは、私のような人間が裏で必死に働いているからなのよ。
たくさんの危険人物をあの世に葬って来たの。
それだけ覚えておいて。
あ、別に、お礼は良いから。
何かに感謝するとか、感謝されるとか、そういうのとても苦手なのよ。
私のやるべき事をする、ただそれだけ。

どうして、秘密工作員になったのかって??
秘密工作員の殆どは小さな頃に事故や病気で両親や身寄りを無くした孤児が大半。
そして、私もその1人。
両親の顔も本当の名前も何も知らないわ。
ずっと幼少から、孤独と戦いながら生き抜いて来た、だからお陰でとっても強くなったの。

さて、まあそんな身の上話はさておき、ここで問題です。
私が流通会社に席を置いているのは、何故でしょうか？

答えはね、反社会勢力の闇流通のルートをいち早く押さえる事が出来るからなのね。
勿論、最新のテクノロジーとネットワークを駆使しているわ。

今日も、まさにその現場、この“東京湾ゴミ埋め立て地”で、大規模な密売取引が行なわれるという情報を掴み、裏社会のドンをこの手で葬る為に、私は颯爽と駆けつけたってわけよ。

あ、そうそう、因みに直属のボスは当社の堀出会長。
だから、こうしてOLとしても、会社に席を置いていけるの。
受話器越し、ボスは私に言ったわ「今回は慎重に、絶対に星を甘く見るな」と。
あ、因みに“星”って言うのは、裏社会のドンの事ね。

こう見えてこの私、訓練に次ぐ訓練で、全ての武術や戦闘術を習得しているから、これまで百戦錬磨なのよ。
ちょっとやそつとでやられる訳がない！

.....
はい。

しかし今回は、無惨にもこのザマです。
相手の数が多かったのか？って、そんなの全然関係ない。

あの男、猫を抱いていたのよ。
私、猫だけは・・・ちょっと・・・ね。

「ボス、ごめんなさい」

という事で、27歳の誕生日。

1人ぼっちで湿った土の中。

生き埋めの生還タイムリミットは25分と言われてるけど、携帯も持ち去られGPSも意味ないし、仲間や誰かが助けてくれるはずもない。

私、人知れず、ここで生涯を終えるのね。

まあ、天涯孤独の身としては、それもアリか……な。

でも、せめて一度くらい恋とかして見たかったな。

いつか素敵な人と出会って、愛しあって、結婚とか、子供とか。

まあ、こんな仕事してたら到底無理だけどね。

「来世は普通の女の子として生まれて来ますように」

なんて、バカみたいな冗談言ったら、身体が冷え切って来たわ。

全身が痙攣を起こしている。

寒いね。これって、いよいよなのよね。

早く楽になりたい。

でも不思議、死ぬってこんな感じ？

すこしずつ楽になって来た。

もう、それとも私、死んでる？

さっきから誰かが私の名前を呼んでる気がするのよ。

サワタリさん！サワタリレイコさん！って

確かに呼んでる、私はここよ。

ザッザッという音と共に、顔や身体に乗った土砂が次第に軽くなり、さっきより呼吸がしやすくなった。

土の中から救い出され、ぼんやり目を開けるとそこに、配送センターの彼の顔が見えた。

彼は肩で大きく息を吐いている。

そして天を見上げ叫ぶように言った。

「ああ！良かった、間に合って！」

「えっ……なんで？どうして？」

「ん～、なんて言うか、あの、まず血相変えてオフィスを飛び出していく貴方を見かけて、

そのあと机にたまたま出荷の荷物を見つけて、その受話器の横に“8時/東京湾”ってメモを見つけて、

それで、なんか心配になって……」

「えっ??何??あなたストーカー??」

「いや！ちょっと！命の恩人になんて事を！」

「どうして土の中って思った？どうしてこんなに早く助け出せたの??」

「ハイヒールが転がってたのと、ここだけ変に盛り上がったので、まさかと思って」

「へえ…そうなんだ…」

「はい、まあそんな感じです…」

「わかったわ」

「え？」

「あなた私と同じでしょ？」

「え？同じって？」

「秘密 работник」

「…まあ、隠しても仕方ないですよ」

「なんでもっと早く助けないのよ！！私がやられて、埋められる所も見てたんでしょ？！」

「うーん。お手並み拝見というか…ボスもたまには痛い目に遭うべきだと」

「あのクソ親父が！」

そう言って私も彼も笑った。

「改めまして、秘密 работник 007(ダブルオーセブン)です。」

「あ、はい。改めまして、0013(ダブルオーサーティーン)です。」

「知ってますよ、通称レディゴルゴ」

「やめてよ！！」

「しかし、泥まみれで美人が台無しですよ」

「何か、ずっと腹立つなあ」

怒る私を見て彼は手を叩いて笑った

「あの、取り敢えず、配送の荷物にペットボトルの水が山ほどあったので持って来ました、これで顔洗ってください」

「ああ、ごめんね。えっ！て言うか、発送の荷物でしょ！？あなた本当に大丈夫？？？」

「まあ、後で何とでもしますよ！それより急がないと」

「え？急ぐって？」

「貴方の携帯のGPS、星がまだ持っているとすれば」

「居所がわかってるの？」

「はい」

「畜生！あの野郎今に見てろ！」

「まあ、2人なら楽勝ですよ」

そう言って笑う彼、意外にもイケメンだと今初めて気が付いた。

そして彼は、ポケットから小さな包みを取り出しそっと私の手に

「あの、今日が終わるといけないので…」

「え？なに、これ??」

「ハッピーバースデーって事で」

「え！えっ！キッモー！貴方やっぱりストーカーじゃない！！」

「いや！だから！それ失礼でしょ！命の恩人なんですよ！助けなきゃ良かったなあ！」

「ははは！嘘、嘘！冗談よ！早く終わらせてバースデーパーティーしましょう」

「怖っ、死にかけた人とは、とても思えないよ…」

「あははは！あ、そうだ！申し訳ないんだけどさ、パーティーのその前に、事務仕事も少し手伝って貰えない？」

「何それ？レディゴルゴ！あなたそれ本気で言ってます？」

「いいじゃん！この際！」

「もう、早く片付けに行きますよ！」

「ねえねえ、ちょっと待ってよ！ 足怪我してんのよ！」

「かすり傷くらいなものでしょ！」

「ちょっと！！ あ！ それと、もうひとつ！」

「ああ、もう……何ですか？！」

そして私は照れ臭いけれど

生まれて始めて、心からこの言葉を言いました

「本当にどうも…… ありがとう！」

そして、この日から、2人の最強チームが始まったのです。

<Fin>